

## 自分の足元を見つめなおすところから：総合的な時間を活用して

江崎，文寿  
元大牟田市立宅峰中学校教諭

<https://doi.org/10.15017/6796310>

---

出版情報：生活体験学習研究. 21, pp.25-31, 2021-07-30. The Japanese Society of Life Needs  
Experience Learning

バージョン：

権利関係：



# 自分の足元を見つめなおすところから

— 総合的な時間を活用して —

江崎 文寿\*

## 1 はじめに

### (1) コロナ禍の学校現場の状況と生徒へ届けたいメッセージ

2020年2月28日夜、生徒指導のため校長室で保護者との話を終え職員室に帰ってきたとき、同僚が「明日から全国一斉の臨時休校げなよ。」といった言葉に耳を疑った。まさに寝耳に水であり、翌日バタバタと生徒たちにもその旨を伝え、何の準備もないまま次の日から臨時休校に入った。いつものように朝練の時間、グラウンド整備をしながら生徒のいない、学校再開の見通しが無いことにどうしようもない無力感を同僚とつぶやいていた。

途中、卒業式と4月の始業式、入学式はあり、とりあえず新学期になった。臨時休校期間何度も家庭訪問はするが生徒たちとも十分話ができず、また平日でもあり保護者ともほとんど会えなかった。5月末からの分散登校を経て6月からは学校生活が再開したものの、授業でも学校生活でも3密を避ける対策を取らざるをえなかった。

その中で改めて気づかされたことは、授業や学校生活が教師と生徒、生徒同士などほんのちょっとした、たわいもないかわりのなかで成り立っていたことである。授業でもマスクをしていて生徒のつぶやきや小さな表情の変化が読み取りにくいことなどによる影響は大きい。なによりも生徒たちの表情や言葉のやりとりでどこか陰りを感じた。教師の感覚的なとらえになるが、ちょっとしたところでの苛立ちや部活動の大会の目標がなくなった喪失感からくる無気力さ等である。2か月以上にわたる自粛生活でほとんど家にいた生徒たちへの身体的精神的影響ははかりしれないという実感があった。

学校が再開してからの教育活動は、制約を前提に

しながらも、このような状況でもできること、このような状況だからこそできるものを創り出したいと考えた。またそのような教職員の姿勢も「壁」にぶつかったときにその状況との向き合い方として、生徒たちへのメッセージにもなるのではないかと考えて取り組みを重ねた。ここでは、中学校2年生の総合的な学習の時間（本校では「学びの旅」と呼ぶ）の中で職場体験学習と修学旅行の場面を活用したキャリア学習について述べ、その考察をしたい。

### (2) 学校の概要

本校は、福岡県大牟田市のなかで熊本県との県境に接する南部に位置する。2016（H28）年の学校再編により、延命中、右京中、船津中の三校が合併した。校区には三池炭鉱関連の社有地跡を活用した公共施設が多くあり、社宅跡地に住宅街が並び生徒数も500名近い市内で一番大きな学校である。

今回報告する取り組みの対象は2年生5クラス183人の生徒たちだ。学校生活アンケート等の各種調査の結果からは生徒たちの自己達成感や自己肯定感などの自尊感情の低さに対する取り組みの必要性を強く感じた。また、学校でも地域でも人間関係の葛藤や生活経験の少なさによる「線」の細さ（心が折れやすいところなど）が増したところにもコロナによる自粛生活の影響が感じられた。そのような状況に対する手立てのひとつとして今回の取り組みも位置付けた。

## 2 総合的な学習の時間におけるキャリア教育の位置づけ

総合的な学習の時間は1998（H10）年の教育課程審議会答申<sup>1)</sup>により「自ら学び自ら考える力などの

\*元大牟田市立宅峰中学校教諭・九州大学人間環境学府教育システム専攻研究生  
連絡先：〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学大学院人間環境学府社会教育研究室  
E-mail: bunju@nifty.com

[生きる力] は全人的な力であることを踏まえ、国際化や情報化をはじめ社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するため」という趣旨で提言され、2002 (H14) 年から中学校でも実施された。1990年代後半の社会環境の変化によるフリーター・ニート問題への関心の高まりを受けて1999 (H11) 年以降にキャリア教育が本格的に推進されたことを背景に、2008 (H20) 年3月に改訂された中学校学習指導要領の第4章「総合的な学習の時間」において職場体験活動が「内容」の一つとして例示され、その取り組みが実施されるようになった。

国立教育政策研究所の調査<sup>2)</sup>によると公立中学校における職場体験の実施状況は98.6%であり、職場体験活動は全国の殆どの中学校で実施されている。高校以上のインターンシップが職場での体験を通じて職業や働き方(職業的な技術や技能の場合もあり)を学ぶことに重点がおかれることをふまえて、中学校の職場体験は、職場を通して仕事の世界に触れ働く人々に接することを重視している。

職場体験を実施している中学校では、緊張感のなかにも意欲的に活動する多数の生徒たちの姿を見ることができている。実施後に生徒たちが書いた感想文などからも職場体験を肯定的に振り返っているものが多くある。

一方、この活動は学校生活と社会生活および職業生活を関連付け、将来の学業を結びつけることの重要性が指摘されている。しかし、国立教育政策研究所の調査<sup>3)</sup>では「教育課程全体をキャリア教育の観点から整理している」と回答した学校は全体の25.0%である。教育課程全体をキャリア教育の観点から整理することでこれまでの授業や学校生活で学んだことと体験活動を関連付けた事前指導を行い、事後指導において体験を再び教科学習や学校生活、卒業後の進路・生き方を意識した指導につなぐ必要がある。そのためには、「働くこと」について様々な場面で丁寧な切り口から考える機会を作る必要がある。

また、修学旅行については交通手段の発達に合わせて活動形態も進化し、いわゆる「見学・周遊型」から班別自主行動や様々な体験活動を取り入れている。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学

び」や特別活動における「体験的な活動」を通しての実践が重視されている。その趣旨を踏まえたキャリア教育の視点も組み込んだ実践が今後さらに求められている。

それらの課題に重ねて今回はコロナ禍により職場体験学習が中止となり、修学旅行も2泊3日の関西方面から1泊2日の九州県内に変更されたことにより新たな工夫が求められる状況になった。

### 3 「例年通り」が通用しないときにこそ試される教師の発想と工夫～協働から生まれる知恵～

#### (1) 改めて「働くこと」にどう切り込むか。

～職場体験学習に代わる取り組みから～

〈2020年10月～11月実施〉

これまでのやり方は、受け入れ事業所を見つけその事業所で1～3日の体験をすることで良しとしてきた。事前指導でそれぞれの事業所の特徴や質問事項の調べ学習をしたり、事後に体験をした内容や感想のまとめをしたりして共有することを指導してきた。その取り組みの有効性はある。しかし、ふりかえると職場を体験することに中心があり、それにむけて事前事後の時間を充てる。極端に言えば、体験することだけに頼るところがある。コロナの制約により職場体験学習ができなくなったとき改めて感じたのは、「働くこと」について考えるとき切り口の丁寧さが必要なことである。

例えば、同じ職場でもその仕事にたどり着いた道筋や仕事への向き合い方などはそれぞれ違う。その違いを丁寧に掘り起こし見えるような場面を設定することは、「働くこと」について生徒たちが考えるときの入口になるのではないかということである。

具体的には、その仕事についての経過や自分にとっての仕事はどんなものか、仕事の中でつらかったことやうれしかったこと等、同じ職場に勤める人たちにそれぞれの違いを語ってもらうことであった。昨年から関わってくれていたNTTの4人のメンバーにはオンラインで、生徒たちの身近にいる学年教師、7月の大牟田豪雨災害にかかわった消防、社協、建築住宅課、防災室の方々にはリアルで登場して語ってもらった。働いている人がそれぞれ持っている違いはなかなか見えにくい。しかし、生徒たちが仕事について考えるときにはその違いが自分を重ねやす

くするポイントでもあった。

今回の工夫のもう一つは、取り組み内容を考えるとき学校外のまちづくりに取り組む大牟田未来共創センター<sup>4)</sup>のメンバーと協働で創り出してきたことだ。これまでの経験から学校側が企画した内容に外部から協力してもらうことはあっても、取り組み内容まで一緒に考えることにはかなりのハードルがある。それは教師自身の意識のなかに教育内容に対する「聖域」のような捉えがあり、そこに「踏み込まれる」ことへの不安があるからだと思う。昨年度からの経過もあり、お互いに対する信頼があったから対等の関係で教育内容づくりを議論できたと考える。

1年生の後半から福祉学習として「誰もが安心して暮らせるまちづくり」のためには、まず自分のなかにある弱さや不安を自分自身が気づき、自己開示できるように協働で取り組みを重ねてきた。それは、生徒たちの自尊感情の低さに対して立場の違う大人側から自己開示することが有効だと議論してきたからでもあった。共創センターのメンバーと学年教師が自己開示をしていくことで生徒たちは身近さを感じていた。その身近さを感じる大人が自己開示していくことで、それぞれの生徒が自分を見つめ、不登校だった生徒が自分の小学校の時のことや学校に行かなくなった気持ちを話したりもした。

## (2) 学びの場として修学旅行の再構築

〈2021年2月4日5日より延期し、3月18日19日実施〉

修学旅行は従来2泊3日関西方面が多く、その中で班別自主研修にむけた調べ学習をしてその結果や感想を事後にまとめるやり方でことが済んでいた。コロナの感染状況をふまえ、今回は市教育委員会より「1泊2日の九州県内」という方向性が出された。そのとき気付かされたのは、修学旅行の目的や何を学ぶものとして位置づけるのかということについて改めて議論することの必要性である。

よく「県内に行っても…」という声があるが、そのとき頭の中にあるのは「県内はもう知っているから行く必要はない」といった意識ではないか。ここでいう「知っている、行ったことがある」というのは、単に知識があるとか訪問したことがあるという表層的なイメージだと言える。

端的に言えば、生徒や教師のなかにあるそのような意識を覆したいという思いが筆者にはあった。ちょうど福岡県の修学旅行への支援として、県内の宿泊と2か所の訪問をするとバス1台につき1日5万円の補助がある事業の情報が入ってきた。この学年には5クラス183名の生徒がいる。コロナ感染対策として、宿泊を原鶴温泉の3つのホテルに分宿をし、バスを10台準備することにした。原鶴温泉を選んだ理由は、朝倉豪雨災害の復旧、復興の話が聞けるからである。昨年7月に地元で豪雨災害を経験した生徒たちにぜひ聞かせたいと考えた。

そこまでは考えたものの、メインになる体験活動をどうするのか、コロナ感染が広がった場合には見学も人数制限や中止も考えられる。より深い学びを県内で仕組む切り口には悩んだ。ヒントとなったのは、バス10台を使うことと必ず昼食が必要となることであった。バス10台で10コースを作ると18人程度の少人数に分けられ、店舗では丁寧な感染対策が取られている。また、「食」には素材や調理法、その背景には生活の知恵や文化が繋がっていることに目を付けた。フランス料理やイタリア料理、韓国料理や中国料理など、ワールドワイドなお店が福岡県内には存在する。昼食として食べるものをいろいろな国の料理にし、そこから食材や調理方法やそれを生み出したその国の文化など、「食」を切り口にすればその学びは深まり広がると考えた。

次に工夫したのは、生徒を受け入れてくださる店舗とその国の文化までお話してくださる方の10コース分を見つけることだった。情報を得る窓口として福岡市にある領事館や友好協会を考えた。それは、紹介を受ける店舗側にも学校側にもしっかりした信頼が背景にある方がよいと考えたからだ。福岡市内には名誉領事館まで合わせると24か所あるが、スタッフが常駐するのは中国、韓国、タイ、ベトナム、アメリカだった。

まず、領事館に直接電話して趣旨を話し、その後依頼文と実施要項をメールで送った。また、友好協会(フランス、トルコ、イタリア)の問い合わせメールにも同じように送った。このような相談の仕方ははじめてだったが、それぞれの対応は丁寧であった。領事館は政府公認の観光関係の機関(韓国観光公社、タイ国政府観光庁)を、友好協会は直接店舗を紹介

していただいた。次に福岡市博多区役所内の博多の魅力発信係に相談し、ホテル内にある料理店を紹介していただいた。途中、紹介していただいた店舗でコロナのクラスターが発生し変更を余儀なくされ、ネットで検索した店舗に相談したところもあった。打ち合わせに行ったときには、どの店のスタッフの方もとても丁寧で前向きに生徒たちのためのプログラムを考えていただいた。

お願いした内容のポイントは、三つであった。一つは料理についての食材や料理法などの特徴の話、二つ目は料理の背景にあるその国の文化についての話、三つめはシェフやスタッフなどその仕事をされている方の生き方や仕事への向き合い方の話である。時間枠はおよそ11時から14時30分の210分を基本にしてその枠内で話の組み立てを柔軟に立てていただいた。店舗によっては文化の話まで広げるところは別の講師の方を友好協会に相談して紹介してもらった。どの店舗の方も中学生にこのような話をするのは初めてだがそのことは自分たちのためになるということで前向きチャレンジしていただいた。生徒たちは、1日目と2日目に2回個人希望を調整して2つのコースを体験できるようにした。

以下、協力店の一覧である。

No	カテゴリー	店 舗
1	フランス料理	ラ・ターブル・ド・プロヴァンス (中央区赤坂)
2	トルコ料理	カフェトルコ (中央区六本松)
3	イタリア料理	ドムス (中央区今泉) グランドハイアット福岡 (博多区住吉)
4	タイ料理	ドゥワンディー (中央区薬院)
5	ベトナム料理	ベトナムカフェ Vinahouse 福大前店 (城南区片江)
6	中国料理	大観苑 (ホテルニューオオタニ内) (中央区渡辺通)
7	韓国料理	大東園 (博多区上川端)
8	日本料理茶懐石	SUITOFUKUOKA (中央区大名)
9	日本料理寿司	同上
10	日本料理だし汁	同上
11	福岡博多の食	ホテルオークラ福岡 (博多区下川端)

※1コース18人を基本としたが、2トルコ料理と9寿司には人数制限があり、それぞれ9人ずつをバス1台にまとめ、11コースになった。

また、朝倉豪雨災害の復旧復興にかかわる話も原

鶴温泉協同組合の事務局長の方に相談して、朝倉市役所復興推進室の方も協力してくださった。3か所の宿泊ホテルにそれぞれ行政の方と復興に関わっているNPOの方が話してくださることになった。

一連の取り組みの中で教師側の課題として感じたことは、取り組む主体の意識である。一つは、プランニングする際の教師自身の意識の中にある「壁」をどこまで超えることができるかということだ。発想の「壁」というより、地域にあるひと・もの・ことをどこまで協力者としてイメージできるかといえる。直接話したり足を運んだりしてみるとうまくいくときもあるし、そうでなくても次の展開が見えてきたりする。領事館も相談できる場所であった。

もう一つは、教師自身のなかにある無意識のところでの物事に対する考え方や感じ方である。たとえば、協力するところには一から十まで教育のことを踏まえてもらわなくてはいけないとか、教育の場だから営利のことや宣伝はいけない等、「教育の中立」を狭く捉えてしまうことである。あるいは教師が生徒に求める姿勢や姿に対して学校外の人たちが違った見方をしていること等、生徒への見方や捉え方の違いである。この無意識の違いは、ややもすると相手への不満や不信につながる場合があり、ネットワークをつくるときの「壁」になることがある。その違いを教師自身が意識することが重要である。

#### 4 足元での出会い直しが生徒のより深い学びにつながる

それぞれの取り組みのあとには、生徒たちがお礼と感想を書くことにしている。A4用紙にタイトルと名前を入れて20行の罫線紙を用意し、一番下の行まで書くように指導している。それは、書くことを通してそのとき聞いた話を自分の中で反芻し感じたり考えたりしたことを自分の言葉で書き出すことで自分自身との「対話」を積み上げていきたいと考えたからである。

これは、1年生のときから習慣にしている。なかなか書けない生徒たちには、友人のアドバイスをもらったり、書き上げた生徒ののを見せたりして時間をかけて取り組んでいる。はじめは苦勞している生徒たちも回を重ねるたびに早く書け、また書くことへの抵抗が少なくなるのは驚きである。

### (1) 少しの安心と見えない仕事のことが次の意欲に ～職場体験学習に代わる取り組みから～

身近な存在に感じる学年教師や大牟田未来共創センターのメンバーが同じ仕事をしていてもその仕事に就く経過やそれぞれの仕事への向き合い方を語ることが生徒たちにとって自然と深く気づくことや考えることにつながった。生徒たちの気づきや考えたことを学年教師グループの話を聞いた「お礼と感想」から拾ってみる。

一つは、人生の中で試行錯誤しながら仕事を見つけていく歩みの違いについてである。「教師になる前までは全員別の夢があり、それに向かって勉強とかしていたけれど、気持ちや家庭でのことで今の教師の道を選んだと初めて知りました。」夢が途中で変わってもよいことは、学年の半数近くの生徒が持った感想でもある。そのことはまだ将来の夢を持ち切れていない不安に「焦らなくても大丈夫なのかなと思って少し安心し、ほっとしました。」という気持ちにつながっていた。そして、「今のうちからたくさんの経験を積んで好きなことをやりたいし、勉強をしていきたいと思いました。」という今の自分たちの生活に目を向けていた。

二つ目は、仕事の見方についてである。「教師の仕事の表、教えるということ以外にも、裏の仕事＝みえないところでの仕事をたくさんやっていることを初めて知りました。」このことは、学年の2/3ほどの生徒が持った感想であり、「どんな仕事にも裏の仕事があり、たくさんの苦労があったから今があるとよくわかりました。」というように仕事の多面性に気づいたところである。そして、そのことは「評価されるのは見える仕事のほうだけど、見えない仕事でも頑張るって努力することが本当にカッコイイことがわかりました。」というとらえで、ものの見方にもつながっていた。

身近な大人としての学年教師からそれぞれの生き方や仕事への向き合い方を聞くことは、仕事を切り口に人や社会の見方を深く学ぶことにつながったといえる。

### (2) 自分の生活や将来を考える学びにつながる ～修学旅行の場面から～

今回のねらいは、足元にある「本物」との出会い

を五感で感じてほしいということであった。学年職員で議論したときも前述のキャリア学習の経験もあり、修学旅行の学びの場としての組立て直しにも前向きで、面白さを感じていたことが取り組みを進める力になった。各国の料理でもトルコ料理やベトナム料理などはじめて知る未知の世界との出会いやフランス料理や中国料理、日本料理等聞いたことはあるけれども深いところは知らない世界との出会い直しである。それを地元福岡で仕組んだところにある。2月初めの日程が2回目の緊急事態宣言で延期になり、3月3週目、修了式の1週間前の実施になった。まとめが十分取り組めず、お世話になった店舗と朝倉の豪雨災害の話をしてくださった方への3通の「お礼と感想」を書くことにした。以下、その生徒たちが書いたものからみてみたい。

生徒たちは、今回の取り組みについてほぼ全員が何らかの気づきや驚きの中に出会うことのおもしろさを感じていた。また、自分の暮らしや将来のことなどを書いたところもその体験が深い学びになったからだと見える。

トルコ料理のお店では、オスマントルコの時代のことやエルトゥールル号の遭難と日本との交流などの話を聞かせてくださった。

- トルコの勢力の広がりを見てみると世界の変化とか読み取れてとても面白かったです。手作りした2つの料理の初めての味で日本の料理とこんなに違いがあったから面白いなと思いました。(中略)このような状況でこのような機会をいただいととても嬉しかったです。(トルコ料理)

この感想を書いた生徒は、水害で床上浸水の被害を受けたことと母親が繰り返しの入院が必要な状況も重なって心を閉ざしかけていたところがあったが、少し笑顔が戻り心に元気さを取り戻していたところにも学びの持つ力を感じた。

- 修行中の仕事や楽しい事やつらいことをたくさん言ってくださって、これからの自分に大切なことがたくさんあってとても支えになりました。私は日本文化についての活動や仕事をしたいなと考えたことがありました。今回学んだことを生かして将来の支えになるといいなと思っています。(茶懐石)
- 自分のお父さんが料理長で家が料理の本ばっかりで、すこしは基本を学ぼうと思っていました。(中

略) 将来は料理長になってみたいと思いました。  
(日本料理だし汁)

上記の感想を書いた生徒は、2年生の9月頃不登校になった時期に仕事で留守がちだった父親がしっかり向き合い話し込み、その後学校に来るようになった。本人にとってはそのことともつながり、将来を考える機会になった。

生徒たちの多くが「ほとんどが私の想像していたものと違ってとても驚いたけど、驚きと同じくらい聞いているのが楽しかったです。(フランス料理)」という言葉に代表されるような体験ができたことは、今回の発想と工夫をした意味があったといえる。

また、朝倉の豪雨災害の話のなかで、NPOの方から4年前に宅峰中の生徒が有明海から三池港付近に流れ着いた朝倉市立杷木中生徒の自転車通学用のヘルメットを手紙とともに届けたことが紹介された。朝倉の人たちはもちろん、生徒たちも不思議な縁を感じたところであった。

- その水害の時に送られてきた手紙に私は感動しました。そして中学生が起こす一つの行動で人に元氣や勇気を与えることだってできるんだと思い知らされ、具体的にはまだわからないけど自分も何か人のために働いてみたいという気持ちが湧いてきました。またそれが仕事の本質なのかなあと思いました。
- 私も大雨を経験したのですが、妹が学校から帰れなかったり、お父さんとお母さんが道が浸かっけて帰れなくなったりと不安な気持ちでいっぱいでした。宅峰中から送られてきた手紙のように手紙が送られてきたり、テレビやネットで支援していただいているのを見て頑張ろうと思えました。そこも朝倉の皆さんが手紙で励まされたところと同じだなと思いました。また、「未来を変える」「人のために自分のために」ということに応えられるように看護師になるという自分の夢をかなえられるようにがんばります。

生徒たちにとって自分の経験と重なった豪雨災害の話は、いろいろな気づきや被災した厳しい状況とともに乗り越えていく仲間のようなつながりを感じ、自分の生活や将来を考える学びになったといえる。

## 5 おわりに

今回は、コロナ禍の制約の中で学校における体験学習・生活場面における実践の工夫について試みたことを取り上げた。そのポイントは、自分の足元で営まれている生活やその中で暮らしている人たちの生き方、またそれぞれの人たちの関わりの中かで息づいている文化的なものなど、それらの意味を教師自身がつかみ、自分の価値観や生き方との関係の中で意義を見出していけるかだと考える。そして、生徒たちが出会い体験して学ぶ場をどのように仕組めるか、ということだといえる。

2年生の国語教材に東日本大震災のときの臨時災害放送局「りんごラジオ」がある。その学習を発展させて、地元FM たんとスタッフの方に7月の豪雨災害時の臨時災害放送局としての動きとコミュニティ放送局としての働きを修学旅行前に話してもらった。また、本校に学習サポーターとしてかかわった方が1年間台湾でワーキングホリディした経験をもとに台湾の言葉や文化について話してもらったことも修学旅行で各国の文化を学ぶ導線として印象深かった。生徒たちも身近な人からの話に深く興味を持っていた。学びを仕組む足元のパートナーに自分が気づきイメージできるかが問われることを改めて感じた。

教師自身が出会い、その人たちや暮らしに向き合い、そこに意義を見出す学びが深まれば、コロナ下でもできる、だからこそできる工夫は必ずあり、その工夫がこれまでの取り組みをさらに充実させ、生徒たちの体験を通した学びをさらに深めると実感したところであった。

## 注

- 1) 文部科学省教育課程審議会答申(平成10年7月29日)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」
- 2) 国立教育政策研究所「平成29年度職場体験・インターンシップ実施状況等結果(概要)」P1
- 3) 国立教育政策研究所「キャリア教育に関する総合的研究 第一次報告書」2020(R2) P:25-26
- 4) 大牟田未来共創センターは、2019年4月、官民が協働することで立ち上がった団体。超高齢社会の先進都市である福岡県大牟田市、一般社団法人大牟田未来共創センター、西日本電信電話株式会社(NTT西日本)、日本電信電話株式会社(NTT)は、2019年8月より地域と企業が新しい形

で関わり合う「パーソンセンタードリビングラボ」による社会課題解決の共同実験を開始している。

**【参考】**

この取り組みはKBC放送「アサデス」の取材を受け、「食”

で世界を学ぶ コロナ禍の修学旅行に密着」というタイトルで2021年3月22日に放送されました。ユーチューブで「アサデス コロナ 修学旅行」で検索するとUPされたものを観ることができます。